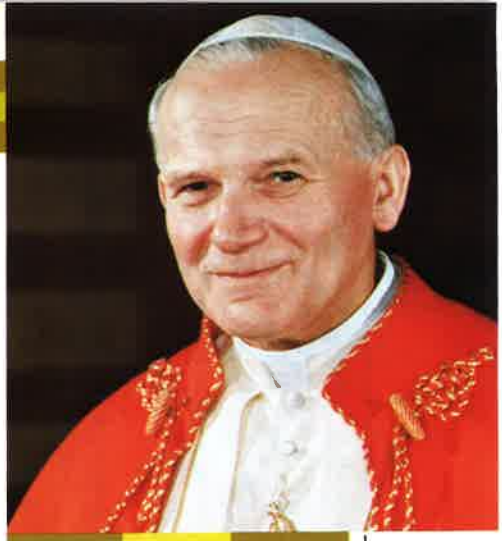
3 MARCH, 1989
平成元年(1989年)3月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
毎月10日発行　第107号



教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1989
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

〈聖金曜日〉

十字架の道行

1 「イエズスの十字架のかたわらには、その母と、母の姉妹と、クロパの妻マリアと、マグダラのマリアが立っていた。イエズスはその母と愛する弟子がそばに立っているのを見られ、母に『婦人よ、これがあなたの子だ』と言われ、また弟子には『これがあなたの母だ』と言われた。その時からその弟子は、マリアを自分の家に引き取った。」(ヨハネ19・25〜27)

2 「スタバト・マーテル」(祈禱書「悲しめる聖母に対する祈」)……聖母が歩まれた十字架の道。その第四留で聖母と御子の出会いを黙想しました。

公会議では次のように教えています。「聖なる処女も、信仰の旅路を進み、子との一致を十字架に至るまで忠実に保たれた。マリアは十字架のもとに立たれたが、これは神のご配慮なしにではなかった。」(教会憲章58)

神の計画は、イエズスの誕生四十日後にすでにマリアに明かされていました。エルサレムの神殿での清めの時、シメオンが預言的な言葉を語ったのです。

「この子は、イスラエルの多くの人があるいは倒れあるいは立ち上がるために、逆らいのしるしとして立つ人です。」(ルカ2・34)この子とは御子のことです。

そして聖母に向かって「多くの人のひそかな思いが明らかにされるのです。あなたの心も、剣で貫かれるでしょう」(同2・35)と言いました。

3 神の計画を知りつつ、マリアはゴルゴタの十字架のもとに立っておられました。心は剣で貫かれ、言いようのない悲しみに満ちていました。キリストに従って歩んでこられた信仰の旅路においてマリアに用意されていた最大の苦しみだったのです。

苦しみ、共にする苦しみ。マリアは神の計画の協力者であったと、公会議は教えています。「マリアは子とともに深く悲しみ、子のいけにえに母の心をもってみずからを結び合わせた。」(『教会憲章』58)

「ともに悲しむ」ことによって、聖母は御子との一致を保たれました。無原罪の聖母マリアは十字架の上の神の御子と一致されたのです。「悲しみの剣」はこの一致を通して、聖母の心を貫きました。

4 公会議はさらに教えています。マリアは十字架のもとに立っておられた。「深く悲しみ……自分からお生まれになったいけにえの奉献に心をこめて同意された。」(同58)

実に意味深いことです。主の御告げを受けた時マリアは、「あなたのおことばのとおりになりますように」(ルカ1・38)と言いました。そして今、悲しみの時にこの同じ承諾を新たにされたのです。マリアは「心をこめて同意された」のです。聖霊によって「聖なるもの」、神の御独子であると解った御方が、いけにえとして自らを無にして十字架の刑を受けられるのですから。

5 ある時、群衆の中の一人の婦人がイエズスの前で御母を祝して「幸せなこと、あなたを宿した母、あなたが吸った乳房は！」(ルカ11・27)と声高らかに言いました。

するとイエズスは「幸せなのはむしろ、神のみことばを聞いてそれを守る人だ」(同11・27)とお答えになりました。

御母に捧げられた称賛を、キリストはこの時受け取られなかったようです。むしろその称賛を十字架のもとに向けられたように思われます。

キリストの御母とは誰のことでしょう？　ごらんなさい。十字架のもとに立っておられる方、神のみことばに対して英雄的な信仰への従順をもって立っておられる方、母としての心の苦しみをもって御子と共に、「御父の御旨」を「成し遂げられた」方です。

6 ヨハネよ、キリストは十字架の苦しみのうちにあなたの御母を与えられました。皆さん、私たちはマリアを母として受け入れました。神の民の教会は「前表」と模範を受けたのです。

スタバト・マーテル……その時からマリアは「母の愛をもって、私たちの誕生と成長において共に働いてくださいます。」　永遠の御父がマリアの御子キリストを「多くの兄弟の長子」(ローマ8・29)と決められたのですから。

「恩恵の計営におけるマリアの母としてのこの役割は、お告げに際してマリアが忠実に与え、そして十字架のもとでためらうことなく堅持し続けた同意から始まって、選ばれたすべてのものの永遠の完成に至るまで続くものである。」(『教会憲章』62)

7 ローマのコロセウムでキリストの十字架の道行を歩む信者の皆さん、贖い主の受難を黙想し、ゴルゴタの十字架のもとで聖母の汚れなき御心を貫いた「悲しみの剣」について考えましょう。御子と共に担われた御母の苦しみを通して「多くの人のひそかな思いが明らかにされるのです。」(ルカ2・35参照)

私たちの心を世の贖いの秘義に結びつけてください。神の御母を通して、信仰、希望、愛の道に、キリストと一致してとどまることができますように。

第44回国際聖体大会

(公式祈願の私訳)

まことに慈しみ深い父よ、
私たちは国際聖体大会の準備をするにあたり、感謝の心で御身にお願いいたします。
願わくは、私たちの主イエズス・キリストの御聖体を通して、私たちがますます一つの体になるにつれ、いよいよキリストの命の力によって生かされますように。
また、聖体の秘義に現われたイエズスの限りない愛を基とし、愛と責任において一致することによって、私たちがキリストのうちに一つとなり、仕える人としてキリストの御名を世界中に広めることができますように。
私たちの主イエズスの御名によって祈ります。　アーメン

平和の元后、私たちのためにお祈りください。(三回)
韓国の聖なる殉教者、私たちのためにお祈りください。(三回)

キリストはご聖体のうちに救いの力を残された

「決して私の足を洗わないでください。」(ヨハネ13・8)

シモン・ペトロは高間でこのように言いました。キリストが、最後の晩餐につかれる前に、弟子たちの足を洗っておられた時のことです。

キリストは「時が来た」(ヨハネ13・1)こと――受難と死の時が来たこと――を御存じでした。しかしシモン・ペトロはまだ気づいていませんでした。ペトロはフィリポのカイザリア地方で「あなたはキリスト、生ける神の子です」(マテオ16・16)と最初に告白しましたが、「キリスト・メシヤ」の定義に「しもべ」――ヤーウェのしもべ――の意味が含まれていることには気づいていませんでした。キリストが意味しておられる「時」つまり「この世から御父のもとに移る時」(ヨハネ13・1参照)が示す真理を認めたくなかったと言ってもいいでしょう。預言者イザヤがずっと以前に表現したように、キリストがしもべ、ヤーウェのしもべ、苦しむ神のしもべであるとは考えなかったのです。

しかし御血の果たす役割は歴史にくっきりと描かれました。過越の羊の血は新しい永遠の契約のしるしとなるキリストの御血において実現しなければなりませんでした。

エルサレムの高間で、過越の食卓につこうとしていた人々にとって、羊の血はエジプト脱出の思い出と結びつき、モーセの時代に起ったエジプトでの奴隷状態からの解放を思い起させるものでした。この隷属状態の中で神とイスラエルとの契約が生まれたのです。

「イスラエルの民はその血を少し取って、食事をする家の入口の二つのかまちと、入口の鴨居に塗れ。(…)それは主を称える過越のいけにえである。その血を見て、私はおまえたちの所を過越して行くだろう。こうして私がエジプトの地を打ちすえる時、おまえたちを滅す災いから、おまえたちは免れる。」(脱出の書12・7、11、13)

羊の血が境となり、その前では懲罰を与えるヤーウェの怒りはおさまりました。高間で過越の食卓につこうとしていた人々は、この血によって得たイスラエルの解放を思い出していました。

シモン・ペトロはもちろん、誰も過越の羊の血による解放がある「予告」であったことに全く気づいていませんでした。キリストにおいて実現する「しるし(前表)」のことです。

弟子たちが最後の晩餐のために高間に集まった時、その実現は近づいていました。キリストは「御自分の時が来た」ことを御存じでした。

「時」とは予告が実現する時、そして長い間過越の羊の「前表」が意味していたこと――キリストの御血による解放――が明らかになる時のことです。キリストは「実現の時」に向かわれます。その夜、そして翌日に起ることを知っておられました。

新しい契約

そこでキリストは手にパンを取り、感謝して言われました。「これはあなたたちのための私の体である。」(コリント①11・24)そして食事の終わりに杯を取り、「この杯は私の血における新しい契約である」(同①11・25)と言われました。

キリストの御体が十字架につけられた時、苦しみのうちに流れ出た御血は神と人間との新しい契約の始まりとなるものでした。過越の羊の血と、エジプトの奴隷状態からの解放の血における旧約。そしてキリストの御血における新しい永遠の契約。

贖いの力、すなわち罪と死への隷属から人間を解放する力、永遠の霊的死と有罪宣告から人間を救う力となるいけにえは近づいていました。

イエズスは新しい契約の血である救いの杯を弟子たちに与えて言われました、「これを飲むごとに私の記念としてこれを行え。」(同①11・25)

「この世にいる御自分の人々を愛し、彼らに限りなく愛を示された。」(ヨハネ13・1)ここに最後の晩餐の最も深い真理があります。御体と御血、十字架の受難と死はこれを意味していました――彼らに限りなく愛を示された――ことを。

エジプトの家の鴨居に塗られた羊の血自体に解放の力があったのではありません。それは神からのものでした。それまで人々はその力に名をつけていませんでした。

今、キリストはそれに名をつけられます。御体と御血、受難と死、いけにえ、全ては救いの力へと至る愛でした。

キリストはそれに名をつけ、実現されました。私たちのためにその力を御聖体のうちに残してくださいました。それが「キリストの時」でした。新しい契約の血によってこの世から御父のもとへ移る時。救いの力となる愛によってこの世から御父のもとへ移る時。

キリストは言われます。「私の記念としてこれを行え」「私のした通りするようにと私は模範を示した」(ヨハネ13・15)「私があなたたちを愛したように、あなたたちも互いに愛し合え」(同13・33)と。

最後の晩餐。キリストの御父による新しい契約の始まり。信仰と愛に満ちた心でこれを新たにしましょう。

生命の伝達と神の計画

夫婦の倫理の原則は、教会の教えによると(第二バティカン公会議とパウロ六世)、神の計画への忠実であります。

この原則をもとに、回勅『フマネ・ヴィテ』は、倫理的に不合法な産児制限(正確には妊娠調整)と倫理的に正しい方法とを、はっきりと区別しています。

まず第一に、「すでに始まった生殖過程を直接に中止すること」つまり堕胎は倫理的に悪です。(『フマネ・ヴィテ』14)「直接的避妊(中絶)」および「夫婦行為が予見され、あるいは行なわれ、あるいはその自然的結果へ向かっているときに、出産をさまたげる(…)いかなる行為も、また同様に排斥されなければなりません。」(同14)　従って避妊はすべて倫理的に悪です。しかし「不妊期間を利用」(同16)するのは倫理的に正しいこととしています。「したがって、もしも、夫婦の肉体的あるいは精神的状態または外的環境のために、妊娠の間隔をのばす正当な理由が存在する場合には、生殖機能に内在する自然的周期を利用して不妊期特にのみ夫婦行為を行ない、こうして、上に述べた道徳原理にもとることなく産児数を調整することが許されると教会は教えます。」(同16)

自然にかなった調整と避妊

回勅は、「表題の両者の間に本質的なちがいがある」(同16)と特に指摘

新刊のご案内

「拓」(ひらく)　ホセマリア・エスクリバー著
新田 壮一郎 訳
(定価一六〇〇円　〒三〇〇円)

説教・講話・書簡等の抄訳

していています。それゆえ倫理的な性格もちがうわけです。「さきの場合には、夫婦は自然が与えた能力を正しく用いていますが、あとの場合には、生殖秩序がその自然的過程をたどるのをさまたげることになります。」(同16)

ここから、倫理的に異なるというより相反する二つの行為が出てきます。一つは自然にかなう産児制限で倫理的にも正しく、他方は正しくない避妊です。この二種の行為は本質的に異なりますから、全く異なった倫理的性格を有しているのです。この点についてはパウロ六世が次のように言っていますし、私も考えを変えるわけにはいきません。「どちらの場合にも、夫婦が、もっともな理由にもとづいて互いの確かな合意の上で妊娠を避けようとし、そのための確実な方法を求めているのは事実である。」(同16)　回勅は右の言葉で認められる理由があって避妊薬や避妊具を使う人がいるのだろうという事実は認めています。しかし、そのような事実を認めたからと言って、夫婦行為の構造自体を根拠にする倫理面の性格を変えてしまうことにはならないのです。

倫理と司牧

先に述べたような正当な理由なしに受精能力を自然調整しているという人が、既婚者たちの中にいるかもしれません。しかし「責任ある親」について考えるには、それは倫理的に別の問題となります。

仮りに、子を産まないと決めることが倫理的に正しいとしましょう。しかしこの場合、どのような行動をとるかという倫理上の問題はまだ残ります。回勅に含まれた(教会の)教えに照らして、肯定か否定かいずれかの、内的な倫理の質を有する行為にその問題があらわれるわけです。肯定的な方は自然の受胎調整で、あとのは否定的、つまり人工的避妊ということになります。

以上検討してきた事柄は『フマネ・ヴィテ』の、教えの提示という形で要約されていますが、それは規範の面と司牧の面とを指摘するという方法でなされています。規範の面とは行動の倫理原理をより一層精密かつ明確にすることであり、司牧の面とはそれら規範に従う可能性(つまり、神法は守りうるということ)であります。(『フマネ・ヴィテ』20)

回勅の内容検討に入りましょう。そのために聖書から導き出される「身体の神学」の光に照らして、その規範面と司牧面との全体をよく調べてみる必要があります。

身体の神学は単なる説ではありません。それはあくまでも、身体についての、福音的、キリスト教的な教えなのです。それは聖書の性格、とくに福音の性格のためです。福音は救いの便りですから、人間にとっての本当の善を示してくれます。(…)

回勅『フマネ・ヴィテ』はこの線にそって、人格としての人間にとって真の善とは何か、男性、女性としての人格にとって善とは何かを、説いてくれています。男と女の尊厳について述べ、そして夫婦の生命伝達という重要な問題に答えています。

使徒勧告『キリストに忠実な信徒』(抄訳)

※普遍的な召し出し

呼びかけ(召し出し)は、牧者と司祭、修道士、修道女だけでなく、すべての人を対象にしています。すなわち信徒も個人的に主の呼びかけを受けており、教会と世界のための使命を与えられているのです。(2番)

※二つの危険

教会内、あるいは教会に結びついた事柄にのみ関心を示し、専門職や社会、経済、文化、政治の分野に固有な責任を忘れてしまう誘惑、および信仰と生活、福音の受入れと現世的地上的諸現実における具体的な行動との分離を正当化する誘惑をさけなければなりません。

信徒は固有でかけがえのない位置を占めています。キリストの教会は信徒を通して世界中のあらゆる分野での希望と愛の印・源として現存するのです。(7番)

※信徒は市井の人

信徒はこの世界で自分の占めている場を捨てるよう召されてはいません。彼らは、この世で普通の生活を営み、学び、働き、友人関係や社会・職業・文化の面でさまざまの関係を築いていきます。

在俗的な特徴は神の創造と贖いの光に照らして理解しなければなりません。神は世界を人々にお委ねになりましたが、それは、人々が創造のみわざに与り、創造された世界を罪から解放し、結婚生活や独身生活、家族や職業その他あらゆる活動の中で自らを聖化するようお望みになったからです。(15番)

※日常生活における神との一致

霊の実りは聖性ですが、その霊に従う生き方をすれば、洗礼を受けた人は励ましを受けて、イエズス・キリストに従い、主をまねるよう要求されます。そして、至福八端を受入れ、神の御言葉に耳を傾け黙想し、よく自覚して積極的に教会の典礼と秘跡に与り、個人的にあるいは家庭や共同体で祈りをし、正義に対する飢えと渇きをもち、あらゆる生活環境の中で愛の掟を果し、兄弟たち特に小さい人や貧しい人、苦しむ人に仕えるはずです。(16番)

※生活の一致

信徒にとって生活の一致はすこぶる重要です。事実、信徒は職業や日常の社会生活を続けながら自らを聖化しなければなりません。したがって信徒は、自分の召し出しに応えるため、日常生活の諸活動を神と一致する機会であり神の聖旨を果す機会であると考えるとともに、人々に仕え人々をキリストにおける神との一致に導かねばならないのです。(17番)

※信徒を聖職者にしてはならない

信徒に奉仕職その他の役目を認め与えるにあたり、牧者は役目の根拠である洗礼を基礎としてそうするよう最大の注意を払わなければなりません。また、牧者は客観的に見て必要がないときや、より良い司牧計画を立てることによって別の方法が考えられるときに、「緊急事態」や「どうしても必要」などの理由を安易に作り出さぬよう注意しなければなりません。(23番)

※家族・政治・文化

●新たな福音化にとりかかる時がきました。●家族に固有な教育の役目が阻害されないようにしなければなりません。●信徒は福音とキリスト教信仰がもつ独特の豊かさであらゆる分野の活動を高めねばなりません。

(シノドスの結論、使徒勧告『キリストに忠実な信徒』全64点の内、最初の35点から抄訳しました。いずれ中央協議会の公式全訳が出ると思います。タイトルは『カトリック新聞』から借りました。)

不変の教え

キリスト者は復活なしに生きられない

1 本日は聖週間の間に私たちが再体験する現実について考えるよう招かれています。「聖」というのは、私たちの贖いに関わる事柄の中でも最も中心となるものを記念するからです。人類史上の出来事の中でこれほど意味が深く偉大なことはありませんでした。キリストの死と復活は歴史上最も重大な事件であったのです。

2 明日から主の死と復活の聖なる三日間が始まります。ミサ典書の説明を読んでみましょう。「キリストは、おもに過越しの秘義によって人類を贖い、神に完全な栄光を帰した。その死去によって私たちの死を破壊し、その復活によって私たちの命を取戻してくださった。キリストの死と復活の三日間は典礼暦年全体の頂点である。一週の内の日曜日に当るのが、典礼暦年の荘厳な復活祭である。」(18番参照)

3 そこで、この日々を熱心に過ごしてくださるよう強くお勧めします。そうすれば、聖なる三日間が皆さんの心に深い跡を残し、皆さんの生活を導いてくれるでしょう。(…)聖木曜日の朝は、世界中のカテドラルで司教が自分の教区の司祭たちと共に聖香油のミサを祝います。その中で司祭職の制定を記念すると同時に、叙階と堅信と病者の塗油に必要な聖なる油を祝別します。そして、午後になると皆さんは篤い信仰をもって御聖体の秘跡に与り、御聖体への愛と賛美を捧げ、あの劇的な夜、ゲッセマニの園で苦しまれるイエズスの、「あなたたちはここに居て、私と共に目を覚ましていてくれ」(マテオ26・38)という招きに応えることができるでしょう。

4 聖金曜日は特に感動的な日です。教会が再び福音史家聖ヨハネの記す受難史に聞き入るよう、また教会全体のために祈り、ゴルゴタの犠牲にマリアと共に参加するよう招くからです。

5 最後に聖土曜日のすばらしい典礼が大きな喜びで心を満してくれます。新しい火の祝福があり、過越しのローソクを手にして明りを消した教会内に入り、「キリストの光」と復活宣言を歌いながらろうそくを灯します。さらに、連禱を歌い、洗礼水を祝別します。そして終にアレルヤの溢れるミサへと続き、復活されたキリストとの聖体の一致に至ります。悲しみと神秘的な喜びに満ちた聖なる三日間全体が復活の日曜日の荘厳な中心に向かって流れて行くのです。

キリストと共に復活する

6 聖週間の典礼に参加することは他のいかなる仕事や関心事にもまさって皆さんの義務であると考えてください。その典礼がほんとうに私たちの感情を清め、夢を高め、キリスト教信仰の美しさと天国へのあこがれを感じさせてくれることを確信してください。

7 キリスト信者とは人類がキリストによって救われたことを理解した人ですから、復活祭がなければ生きることができないのです。教会の最初の頃から祭日中の祭日である復活祭は様々な方法で盛大に祝われてきました。三世紀には独特のかたちを持つようになります。復活の前夜に洗礼式が行われるようになるのです。これは聖パウロの洗礼の神学が前面に出てきたことを示しています。洗礼をキリストと共に死去し埋葬され、キリストと共に復活して「恩寵」の新たな生命への参加をすることと考えたのです。復活祭を祝うとは、キリストに出会い、キリストと共に蘇って新たな命に入り、上にあるものを望む、つまり心を上げることです。(コロサイ3・1参照)

8 特に聖木曜日を思いつつ、皆さんに心からお願いします。皆さんの司祭をもっと愛してください。司祭の召し出しは、確かに平和と喜びですが、それはまた十字架と殉教でもあります。事実、司祭は自らを余すところなくキリストに献げ、キリストの力と使命をもって行動します。これは、司祭の偉大さと尊さのもとであると同時に、受難と苦しみのもとでもあります。ですから、皆さんの司祭と心を合わせ、彼らの支えになってください。そして特に彼らのために祈ってください。(…)

9 苦しみのイエズスに付き添い、その死にあたって十字架のもとにとどまった、まことに聖なる御母マリアが、復活へと向かう聖なる三日間の旅を導いてくださいますように。皆さんに使徒的祝福をお送りします。

(三・二十六)

教皇の〈南米語録〉

◆ キリスト信者は、誠実な対話と友愛の雰囲気のうちに諸問題解決を目指して尽力するにあたり、自分の信仰を隠したり無視したりすることはできません。使徒職への熱意は、狂信ではなくキリスト教的な生活の当然の結果であるからです。人人の意向を裁いてはなりませんが、善を善、そして悪を悪というように、それぞれを本来の名で呼ばなければならないのです。周知のように、真理を歪めても、問題を解決することはできません。

◆ お父さん、お母さん、あなた方には、子供たちを日曜日のミサ(聖体祭儀)に連れて行き、また彼らがキリスト教的な教育を受けるよう配慮する義務があります。

◆ 確かに、夫婦生活と家族生活を営むにあたり、色々な困難に遭遇します。このような困難がないときはなかったと言えます。しかし、困難を克服するために必要な天からの助けが不足することはないと確信してください。キリストへの忠実を保ってください。そうすれば、幸せになれるはずです。教会の教えに忠実であってください。そうすれば、日毎に深くなる愛によって互いに一層強く一致することができるでしょう。

忠実が流行遅れになったことはありません。この世界に再び微笑みを取り戻すのは、ほんとうにキリスト教的な家族であることを確信してください。

◆ 暴力や憎悪を正当化する考えの影響を受けないように注意してください。そのような考えは、家族の成員を歴史的進化の一要素と化し、家族と家族を階級闘争の中で互いに対立させてしまいます。

◆ 他の国々が、みなさんの産児制限を条件としてのみ、経済その他の援助を与えるというような不正義を認めないでください。

◆ 結婚と家族に関する国法は、個人個人と家族の権利を妨げずにそれを擁護し、出産の邪魔をせずにそれを保護するものでなければなりません。

(八八・五)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部七十円送料四十円　■一年予約八〇〇円送料五〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替　神戸　3-72393